（所属）

（学籍番号）　（氏名）

英語学概論A（第1・2ターム　木曜日4限）

担当教員：田子内 健介　先生

2022年8月11日

**英語学概論A 期末レポート**

私は授業で扱った分野及び事項について、第12章「音韻から見る英語らしさ」に関連して、「国際共通語としての役割を担う人工言語」について調べ、まとめ及び考察を行う。

1. **言語とは**

「人工言語」について論じる前に、これと関連する用語として、まずは「言語」の定義を確認しておきたい。土屋・秋山・大城・千葉・望月（2019）によると、言語とは「情報交換」の手段であると同時に、「認識・思考」、「思想表現」、「文化の創造と伝承」としての機能も有しているということが示されている。

「情報交換」については、事実や知識などの客観的な情報、および体験談や経験などの主観的な情報を交換するコミュニケーションの手段として、「言語」が用いられている。また「認識・思考」に関しては、我々が日々行っている思考活動を媒介するものとして、「言語」が用いられている。さらに「思想表現」については、他者とのコミュニケーションを目的としない「思想の自己表現」としてのアウトプットに、「言語」が用いられている。そして「文化の創造と伝承」については、小説や俳句などの形でアウトプットすることによって、それ自体に新たな価値を生み出すために、また法令や条例、歴史に関する記述などの形によって、時代の文化を述べ伝えるなどの目的のために、「言語」が用いられている（土屋・秋山・大城・千葉・望月，2019）。

なお、これらの4機能は独立しておらず、互いに関連し合っている。つまり言語とは、「コミュニケーション及び情報交換の手段」、「認識・思考の手段」、「思想表現の手段」、「文化の創造や伝承の手段」という4つの機能を有しており、またいずれか単一の機能のみを発揮するという極めて稀なケースを除いて、何らかの目的に対して、複数の機能・役割を担って用いられているもの、とすることができる。

1. **人工言語とは**

日本大百科全書（ニッポニカ）においては、「人工言語」は、特定の個人もしくはグループが意識的に作った言葉のことであると定義されている。自然に発生し、昔から話され使われてきた言葉である「自然言語」と対比されることがしばしばある。自然言語の例としては、日本語や英語が挙げられるのに対して、人工言語の例としては、国際共通語としての目的を持って作られたエスペラントや、記号の組み合わせによって論理性を表現することを目的とした論理記号、またコンピュータを操作するためのプログラミング言語などが挙げられている（吉田，2022）。

一方で精選版 日本国語大辞典においては、「人工言語」は、人間がある目的のために作り上げた言語であると定義されており、その中でも国際共通語を目指して意図的に作られた、エスペラントのような国際語・国際補助語としての言語と、コンピュータ用のプログラムを作成するための言語の2つが挙げられている（小学館，2022）。

1. **国際共通語としての人工言語の例**

上記の第2項においては、国際共通語及び国際語・国際補助語としての人工言語の例が取り上げられていたが、本項ではより詳細に調査を行う。

1. **エスペラント（Esperanto）**

エスペラントとは、ラザロ・ルドヴィコ・ザメンホフ（Lazaro Ludoviko Zamenhof，1859-1917）によって1887年に提唱された国際共通語である。1878年にはすでに原案を作り上げており、9年間の言語運用の後に、エスペラントの教科書を自費出版した。

エスペラントの出現に関する歴史的経緯としては、ザメンホフがユダヤ人として生まれ、ことばや宗教が異なる中で対立が勃発していたという生育環境に起因して、お互いの言語や宗教が最大限に尊重されつつも、異なる民族間でも対話することのできる共通語を創作したのではないかと考えられている。

また現在のエスペラント話者数については、およそ100万人と推定されており、その利用場面については、旅行や文化交流、人と人との相互交流などに用いられていると記されている（日本エスペラント協会，2022）。

1. **国際手話（ISL；International Sign Language）**

国際手話とは、国際会議やスポーツ大会において用いられている、国際的に通用する手話としての国際共通語である。しばしば “Gestuno” や “International Sign Pidgin” とも呼ばれている。1980年代から用いられているものの、創作した人物や出現した具体的な年代はわかっていない（McKee・Napier，2002）。

なお、世界全体には7000万人以上の手話者がいると考えられているが、一方で国際手話の話者人口については不明である（United Nations，2022a）。

1. **国際共通語が世界標準になれる日は来るか？**

上記の第1項から第3項にかけて、言語、人工言語、及び国際共通語・国際補助語・国際語について調査してきた。では果たして、エスペラントや国際手話などのような国際共通語が、世界標準としての言語の立ち位置を獲得することはできるのだろうか、という疑問を抱いた。

結論から申し上げると、私は国際共通語として作られた人工言語が、世界中で利用されている英語やASL（American Sign Language）などに取って代わって、世界標準の言語として用いられることは難しいと考える。その理由として、言語が果たすべき機能を果たすことができないということが挙げられる。

上記の第1項では、言語のもつ役割及び機能について定義を行い、言語には「コミュニケーション及び情報交換の手段」、「認識・思考の手段」、「思想表現の手段」、「文化の創造や伝承の手段」の4つの役割・機能があるとしたが、これを人工言語にも当てはめて考えてみる。

まず「思想表現の手段」については、人工言語の学習者自身の中で完結させることができる行為であるため、問題なく機能させることができる。次に「認識・思考の手段」については、学習者の習熟度にもよるが、仮に人工言語を第一言語ないしは第二言語として習得した場合、これについても問題なく機能させることができる。

しかし「コミュニケーション及び情報交換の手段」については、ある程度の話者数が存在しない限り、話し手が人工言語を習得していたとしても、聞き手が同一の人工言語を習得しているとは限らないため、条件によっては十分に機能させることができない。エスペラントやISLなどといった、同一の文化を共有しているコミュニティ内に限っては機能させることができるが、エスペラントの話者数100万人を全世界の人口80億人で割ると0.0125%であることから、全世界という規模で考えると、難しい側面があると考えられる（United Nations，2022b）。また「文化の創造や伝承の手段」については、同一コミュニティ内でしか文化を継承することができないことから、基本的に難しいのではないかと考えられる。

以上のことから、人工言語は、言語の役割及び機能の4要件を満たしておらず、言語が果たすべき機能を果たすことができていないため、国際共通語として創作された人工言語についても、世界標準の言語として活用されることが難しいのではないかと考える。

**引用文献**

McKee R., Napier J. (2002). Interpreting in International Sign Pidgin: an analysis. Journal of Sign Language Linguistics 5(1)

日本エスペラント協会（2022）．もっと詳しく…　Saluton! ～エスペラントとは～ Retrieved from https://saluton.jei.or.jp/pludetale/（2022年8月11日）

小学館（2022）．じんこう-げんご【人工言語】　精選版 日本国語大辞典　コトバンク Retrieved from https://kotobank.jp/word/%E4%BA%BA%E5%B7%A5%E8%A8%80%E8%AA%9E-4700（2022年8月11日）

土屋 澄男・秋山 朝康・大城 賢・千葉 克裕・望月 正道（2019）．最新英語科教育法入門　第4版　研究社

United Nations (2022a). International Day of Sign Languages Retrieved from https://www.un.org/en/observances/sign-languages-day（2022年8月11日）

United Nations (2022b). Population Division Retrieved from https://www.un.org/development/desa/pd/ https://www.un.org/development/desa/pd/sites/www.un.org.development.desa.pd/files/undesa\_pd\_2022\_wpp\_key-messages.pdf（2022年8月11日）

吉田 夏彦（2022）．人工言語　日本大百科全書(ニッポニカ)　コトバンク Retrieved from https://kotobank.jp/word/%E4%BA%BA%E5%B7%A5%E8%A8%80%E8%AA%9E-4700（2022年8月11日）